



第139号

発行所 上高井教育会
発行人 上高井教育会長 純長
山崎 委員 英雄
編集人 会編 委員 岩須
黒坂 新聞社
印刷所 須坂

研修私見

町田 徳

最近の新聞紙上で教育問題を
を取り上げない日は無い程で
ある。非行、不登校、いじめ
暴力行為、学力低下の問題
等々。こうした事が起る度に、
家庭での子育てや地域の教育
力が云々され、学校教育のあ
り方や教師の指導力について
多く論じられている。

教育問題で新聞に寄せられ
る学校や教師への願いは次の
四つに要約できる。
(1)子どもにしっかりと学力を
つけてほしい。
(2)子ども一人ひとりを大事に
考えてほしい。
(3)子どもにもっとかかわりを
もってほしい。
(4)教師としての力量をしっか
り身につけてほしい。
このように教師の力量の向
上を求める要望が多い。もと
より教育は親や社会の教育力
と学校が協働しないと成果を

上げる事ができない。私た
ちは責任を他に求めるのでは
なく親や社会の期待に応える
ために、次の力をつけるよう
研修に努めなければならぬ。
(1)実践的指導力 教育のプロ
として必要な知識と技術で
ある。毎日の教育活動を充
実されるために高い専門性
に裏づけられた実践的指導
力が大切である。

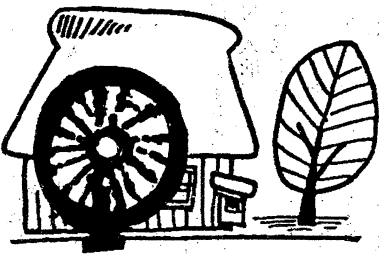
(2)豊かな感性と包容力 子ど
もを見る確かな目 子ど
もの気持ちを感じとる心の
豊かさ。一人ひとりの子ども
の違いを認め受け入れる広
く豊かな心である。
(3)広い視野と先見性 確かな
学力観 学校観を持ち急激
な変化を続ける社会に主体
的に対応して生きていく子
どもに何を学ばせ体験させ
ておくことが必要かを展望
して教育する見識と力量が

望まれている。
私たち教師に求められてい
る力をつけるには毎日の学習
指導の充実を目標に取り組む
ことである。一時間一時間の
指導の準備を十分に子ども
もたちに本当にわかる指導を
する。そして学ぶ楽しさ、共
に追究する学習集団を育て、
子どもたちの自己実現を援助
し、社会や親の願いに応える
指導をすすめることである。
毎日の実践の積み重ねから自
己への課題を明確にして研修
への意欲を高め力量向上への
真剣な取り組みになってくる。

こうした研修への取り組み
は校内研修をより活性化し、
教師相互に自己の課題を解明
するために質の高い授業を参
観して向上をはかることがで
きる。つまり校内研修は教師
の日常の授業や学級経営の実
践的な営みの中で課題を持ち
自己変容を目指す研修になら
なければならぬ。
学校の枠を越えて考えると
幸い上高井教育会には委員会が
全員参加している研究委員会
がある。各教科や領域にわ
たってテーマを決め中心講師
を三枝先生にお願いして指導
研究をすすめている。本年度

は「基礎・基本の定着」を中
心に年二回の研究日を設けて
子どもたちの学力工場を願っ
て全員で取り組んでいる。
さらに同好会があり同好の
人があふ集い、教科指導の根
幹になる教師の豊かさ・確か
さを求める研修の場として委
員会と共に大切な活動である。
教師として目前の子どもの
成長を願いを持ち実践を積み
重ねない限り自己への課題が
明確にならない。課題がない
と研修がおざりになってしま
う。日常の実践を大切に
して自己変容のための研修に励
み力量を高めて子どもを伸ば
していく。子どもの伸びる姿
の中に教師が自己の教育への
取り組みの成果を見る時に教
育の情熱が湧いてくるように
思う。こうして委員会研究や
同好会の活動が一層充実する
ように願っている。
(森上小)

学校の枠を越えて考えると
幸い上高井教育会には委員会が
全員参加している研究委員会
がある。各教科や領域にわ
たってテーマを決め中心講師
を三枝先生にお願いして指導
研究をすすめている。本年度



須高の自然①

仙仁山のハルニレ 堀米 富平



本種は国道須坂菅平線の山
の神、仙仁川寄りの道路脇に
立っている。樹高約十五尺、
幹囲二・六尺、主幹は根元か
らS字形に曲がり、枝を分け
ながら頂上まで達している。
当地方ニレには春開花する
北方系のハルニレ、枝に縦縞
状にコルク層が突起するコブ
ニレ、葉の先が三裂するオヒ
ヨウ、秋に開花する南方系植
栽のアキニレがあるが本種は
ハルニレである。北海道大学
では三人でだきかかえる巨木
に成長している。当地方では
雑木林や自然林に広く分布す
るが薪炭材と共に伐採され、
大樹となることは少ない。
仁礼は楡井と表記されるこ
とがあり、鎌倉時代や南北朝
の史料に地名、人物名して現
れるが、植物名ニレに由来す
る命名である。
(須坂市天然記念物(高山小))

教育会だより

- 7・9 第4回常任委員会
- 13 教研集会分科会長・司会者会 於教育会館
- 17 第5回代議員会
- 27 上高井教育七団体連絡会結成会 於教育会館
- 8・29 上高井教育七団体連絡会代表者会 於教育会館
- 9・3 第5回常任委員会
- 3 教研集会中間連絡会 於教育会館及び市公民館
- 13 第6回代議員会・信教各種研究調査編集委員中間報告会(1)
- 10・5 上高井教育研究会 於墨坂中学校
- 22 第6回常任委員会
- 22 上高井教育会報第140号発刊―研究委員会中間報告―
教育課程研究協議会
- 24 上高井郡市PTA連合会研究会 於須坂小学校
- 28 第7回代議員会・信教各種研究調査編集委員中間報告会(2)

夏期研修会に参加して

今年度の夏休みも多数の先生方が研修会、講習会に参加されました。その中から得られた貴重な体験や感想をお寄せいただきました。

伊藤温先生の講習会に参加して

音楽同好会 小林登志子

笑顔の中にも研ぎ澄まされたいような目と耳で、そして体で回りの空気の変化を敏感にとらえる。伊藤先生から醸し出されるそんな雰囲気は、身が引き締まる思いがしました。八月四日(土)、栗ガ丘小学校を会場に、同小学校の五年生と合唱団の子どもたちへの伊藤先生のご指導を午前中参観し、午後は、参加された先生方へ指導していただきました。

五年生の学級への指導では、三部合唱曲「空がこんなに青いとは」で、ソプラノとアルトの各パートから一人ずつ出して歌い、よく歌えない組は全組歌った後でもう一度というように、何度か歌いました。一人ひとりが音程やリズムを正しくしっかり歌えないと、全体で合唱してもよくならないというごとなのですが、子どもたちの中には、外からの参観者のいる中で一人ずつ歌うということに抵抗のある子どももはやはりうつつむきがちななり、口先だけでつぶやくような感じになってしまったり、また歌わなければいけないというこたにならなくなってしま

夏期絵画講習

美術同好会 永井 教雄

三十名ほどの参加者を得て、八月四日、今年も猛暑の中、裸婦絵画講習を実施することができた。同好会員のみなならず、一般の絵画の同好の士が、「この講習会に参加しなければ夏を過ごしたことになる」といった意気込みで

ず行きつかせるように指導できるのか……と思いを巡らし、結局中途半端に終わってしまったように思います。伊藤先生が、子どもたちのちよつとしたつぶやきも聞き落とさず、卑下したような発言には厳しく対して、また、モデルとなるような歌い方をしている子を全体の前で認めたりしているうちに、子どもたちの姿勢や目の輝きが違ってきました。時と場合によってはこのような厳しさが普段欠けていたように感じ、中途半端が一番よくないと反省させられました。

その他、合唱団への指導や午後の先生方への指導の中では、動唱表現を扱われましたが、こちらの方はまだ勉強不足で、さらに学べる機会があればと思っています。(日滝小)

講師の福田先生は、三十七回目の夏期講習であり、体力的に限界に近いので本年を以って講師を降ろしてくれるよう言われていたので、来て欲しくない時をとうとう迎えてしまった一種無念な気持ち

を抱きつつ、それぞれ最後の教えに期待しての講習であつた。私が他郡で受けた講習は、どちらかと言えば、会期中に作品を仕上げる作品中心の機会であつたように思う。福井先生は、「講習会は作品を制作する場ではない。自分の課題に向かつて挑戦し、自己開拓していく学習の場だ。」と言われる。本郡の講習会は、参加者の個性が丸出しであり、課題克服に四苦八苦している生みの苦しみが会場一杯ムンムンとしていて、熱気にあふれている。モデルの休みにあふれている。互いに取組み中のキャンパスに見入ったり勝手な批評を言ったりして、制作の緊迫感あふれる厳しさとは打って変わった和やかな空気が流れるのも魅力である。

さて、この講習会の精神である自己開拓ほど難しいものはない。自分の殻から脱して一つでも二つでも「ウン、これだ。」と言える確信を持つことは、いかに難しいことか、自分の思い上がりや追究の甘さか、思い知らされるのである。少なくとも私は毎回そんな思



さったもので、「石の風化」がずらりと展示された会場は、めったにお目にかかれな

い迫力があつた。

今後の講習会はどのようなあるべきか。課題大きい、美術・図工を教える教師として、自己研鑽の場をどのように作って行くべきか、共に考えなければならぬ。

(墨坂中)

地歴同好会 大笹街道巡検に参加して 勝山 幸則

「油峠」「土堤道」、須坂に育ちながら初めて耳にした言葉である。これは、七月二十九日地歴同好会主催の大笹街道巡検に参加した際、講師の市川健夫先生、青木広安先生を初め、先輩の先生方から教えていただいた言葉である。私は、この郡に昨年よりお世話になり、地歴同好会にも仲間入りさせていただいたが、例年行われるこの夏季臨地学習に参加したのは初めてであった。

聞くところによると、この研修会も今年で十一年目を迎えたそうだ。大笹街道は、江戸時代初期に幕府によって公許された道である。当時、北国街道の脇街道として、善光寺平と北上州を結び、その延長は江戸に達する交通・運輸の重要な通路としての役割を果たしていたことである。

私は、この研修会に参加し、まず学んだことは、歴史（歴史に限らず、どんなものでもそうなのであるが）を知るために、自分の足・耳・目を使った研修を積むことが大切

だということである。それは、現在自動車で瞬時に通り過ぎてしまふ道筋も、散在する旧道をたどるとそこには、往時の面影を肌で感じることで、さる場所が、今も残っているということである。仁礼宿の道祖神原の道標「右すざか、左せん光寺」このの北入口関谷の番所跡と伝わる石積み、一部、又菅平高原に今も残る「土堤道」などがそうである。中でも、土堤道は、冬期吹雪に旅人が道に迷うことを避けるため、幕末に築かれたものだそうだ。そこに実際に自分の足で立ってみると、当時の人々が厳しい気候の変化の中、この道を往來していた様子が目に浮んでくる様な気がした。さらに、根子岳中腹に残る遭難者の碑や牛馬の供養塔を見ることにより、一層深いものを感じさせられた。

この様にして、私たちは、油峠を越え、大明神沢に至る群馬県へと研修を進めたが、最後の万座温泉での入浴休憩も私にとって大きな収穫であった。日頃なかなか話をする機会のない他校の先生方と場につきりながら語り合えたひととき。それは、大変有意義なものであった。

同好会は、私たち自身の見聞を広げ、人間としての教師の力量を高める会であると思う。今回の大笹街道巡検は、そうだった意味からも、とても素晴らしい研修であったと思う。

(高甫小)

新卒一年目の研修

林 尚之

四月、私は桜の花びらの舞い散る中、新任校の門をくぐりました。初めて見た相森中学校はまだ木造の校舎がそびえ立ち、どこか私が卒業した中学校の面影がありました。

そのため違和感なく、すぐに親しむことができました。現在は校舎改築中で、その校舎の姿はなく、ブルドーザーの音が毎日鳴り響き授業に支障を来すことも何度かありましたが、新しい快適な校舎で生徒と共に学ぶことができるのでうれしく思っています。

私たちが初任者には「初任者研修」というものが用意されています。校内研修、校外研修、そして折りに触れ、多くの先輩方からご指導いただき、不足している部分を補っています。

しかしながら、力不足・経験不足から、授業・部活動・学校生活の中、思うようにいかずとまどいを感じているのも事実です。

私たちの初任者には「初任者研修」というものが用意されています。校内研修、校外研修、そして折りに触れ、多くの先輩方からご指導いただき、不足している部分を補っています。

校章・校歌めぐり⑨

東中学校

東中学校校歌 竹内隆衛 作曲
小山光男 作詞

- 一、緑さやけき 生い松の 精気たけよう 夏端に われしが母校 そびえ立つ 学びの広野 わけゆかんと 東 東 中学校
- 二、歴史ゆかしき わが郷土 水千歳に 清く澄む 文化も富も 興すべき われらの力 この気魄 使命を担い つとめなん 東 東 中学校
- 三、東の山なみ 日は昇る 今栄光の日は昇る 希望にあふれ 新世に 学べる業を 進まんとし いざ発刺と 進まんとし 東 東 中学校

校外研修から帰ると、いろいろな先生に「身になりましたか。」とよく聞かれます。その時少し悩むのですが、いつも同じ考えが頭に浮かびます。「身になったが、ならないかはまだわかりませんが、吸収しようとしています。何か何ヶ月か何年か先の、きっと自分の血や肉となることを信じて学ばせていただいています。」

これから先にも、いくつか研修が用意されていますが積極的にいろいろなことを吸収していこうと思います。

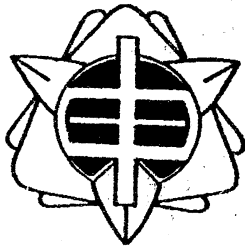
(相森中)

当校の校章・校歌は昭和三十四年の入校式以来精神的象徴とされてきた。

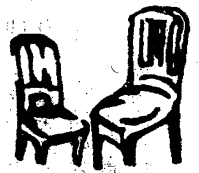
「校章」の図案と当時東中学校3年2組に在籍していた竹前郷史氏の創作である。三つ山と三つのペンとは東の文字との部分で構成され、中央の山は区内のあずま山で、それが東の地を抱えている地勢を示し、三つのペンは進んで学問に精進し、知性を高める「三心」の理想を示している。文字は東を表し、文字を丸くして東方から昇る太陽をも示している。

「校歌」の歌詞は歌詠みで当時の公民館長であられた竹内隆衛氏の作である。一連で

東中の緑の精気にあやかるとり無き学びの道の前進を歌い、二連で東の地の歴史的清潔感をエネルギーとして新しい文化の創造を歌い、三連で周囲の山並みに抱かれる平和の意志を歌い上げている。作曲は当地出身の音楽家小山光男氏で「精根尽くして作曲したい」と取り組まれたものである。各連の最初の2行はゆつたりと歌い次への高まりの序である。中の3行は強弱の変化をはっきりさせ、最後の1行で更に高揚していき、躍動するエネルギーをこめて曲なのである。(町田 滋)



火ばら談義



不思議な「心」

吉田 悟

手足の動きや声までBとなつてしまふ不思議さ。

もし、場面場面で人格がちがうとしたら、いったいその人物をどうやってとらえることができるでしょう。彼の本当のパーソナリティを理解するにはどのような長期にわたる観察が必要になるとしても。

こうしたことから考えると「身体」と「心」とは全く別のものであると考えられます。「人格」が「心」によって形成されると解釈するならば、人格をとらえる程むづかしいことではないということになります。

「幽体離脱」ということも言われますが、このことと「多重人格」とは同一現象か、少なくとも類似したものであるととらえられるでしょうか。「心」の研究がもっと進み解明される日が楽しみです。

井の中の蛙大海を渡る

中澤 洋子

子どもの頃、いえ実はずい最近まで、私は日本ほどいい国はない、と信じて疑わず、そう思える国の民として生まれたことを本当に幸せだと思える幸せ者でした。受験戦争や通勤ラッシュもあるけれど、そうだったことは一日や人生の中での一過的なできごとで日々の暮らしにそうグダメージにはならず、飢えや渇きはないうし、現実に存在する物なら欲しい物は贅沢を言えば大抵手に入るし、飛び道具の玉に当たると心配も楽に潰れる心配

もする必要はないし、荷物に座席の番をさせて駅弁を買に出られる程治安はいいし、人々は清潔で文化的な暮らしを営み、四季は変化に富み、みずは豊かで旨い。しかし、海外旅行という幸せな体験をする度に、実はそうでもないぞ、と自分の祖国神話に対して首を傾げざるを得ないいろいろを見聞きしてくるのです。

成田空港に降り立つと、道も民家や公共の建て物も街もすべてが清潔で近代的で美しく

編集後記

猛暑の季節から爽やかな秋の季節へ。教育実践の糧を求め、研修に参加された会員の玉稿を編集しました。お忙しい中、誠にありがとうございました。(市川・武田)

心のゆとり

植木 京子

過ぎてきました。

大きな粒だけを選んで、夢中で自分のかごに入れて子どもたちの姿を見て、日頃余裕のない生活をしている自分が反省させられました。時間が作れても、仕事の間が気がかりで心にゆとりがなくヒステリックに子どもに当たってばかりでした。親の都合で頭ごなしに命令されたり怒鳴られたり、子どもにまばい迷惑です。子どもにまで能率的に行動することを要求しては、回り道をしたり失敗したりして、自ら学び

取っていくことが必要なのに。最近4歳の娘に、「この頃、お父さんとお母さん、動物園とマクドナルドへ連れていくのを忘れてる」と言われ、ハッとさせられました。学校や家の仕事が第一で、子どもの気持ちなんて少しも考えていませんでした。どこかへ行くことばかりがゆとりではないと思います。親子で気分転換ができて、ゆっくりに楽しむ時間と場所を時々作っていきな

著者はこう語っています。「人々はこれまで、私が多重人格症という分離障害から回復したとの印象を受けており、ところが私はこれまで二十二年のパーソナリティを知っているのです。そして今日まで生きてきて、ようやく彼女等の消滅を語るに至ったのです。」

午前中みんなで摘んだばかりのブルーベリーを洗って、半日かけてジャム作りをしました。焦げないようにかきまぜ、みんなで味をみながら砂糖を加えていきました。夕食後、ジャムをビンに詰めて殺菌している横で、小学校一年の息子は、ブルーベリー摘みのことを日記に書いていました。(旭ヶ丘小)

一人の人間の中に他の人間(パーソナリティ)が存在する。しかもそのうちのAが主人公なのかBが主人公なのか外から見えている私達にはわからないのです。

子どもはこう語っています。「人々はこれまで、私が多重人格症という分離障害から回復したとの印象を受けており、ところが私はこれまで二十二年のパーソナリティを知っているのです。そして今日まで生きてきて、ようやく彼女等の消滅を語るに至ったのです。」

子どもはこう語っています。「人々はこれまで、私が多重人格症という分離障害から回復したとの印象を受けており、ところが私はこれまで二十二年のパーソナリティを知っているのです。そして今日まで生きてきて、ようやく彼女等の消滅を語るに至ったのです。」